

## カフカの『小さな女』における「お見通し行為」

西 嶋 義 憲

### はじめに

『小さな女』(*Eine kleine Frau*) は、英語の „I“ に相当する 1 人称単数の人称代名詞 „ich“ で言及される語り手が、ある小さな女との関係について語る作品である。語り手の説明によると、この女性は語り手によって不快な思いをさせられているという。語り手にはそのような意図はないのだが、女性の怒りをかっているらしいのだ。このことをめぐって語り手はあれこれ苦悩し、考えをめぐらせる。それがこの小説の内容である。描かれるのは、基本的に、語り手が想定する世界である。相手の女性が実際にどう考えているのか、2 人の関係を周りの人たちがどう捉えているのか、これらについては語り手の語りを通して提示されるのみである。語り手によって他者の内面世界が見通されているわけである。そのような見通す行為は相手の思考内容を断定的に提示する「お見通し発言」(*durchschauende Äußerung, seeing-through utterance*) の基礎となるものなので、「お見通し行為」(*durchschauender Akt, seeing-through act*) と名付けることができる。本論では、この作品を「お見通し」の能力、すなわち、相手の考えを見抜く能力の優位性をめぐる心の葛藤という観点から分析を試みる。この観点により、語り手の「お見通し」能力が他者のそれを凌駕しているので、結局のところ、語り手の悩みはそれほど問題とはならないとの結論にいたる過程を考察する。同様の構造は、『父への手紙』(*Brief an den Vater*) にも見られるので、本研究は『父への手紙』の構造との平行性を明らかにすることになる。

## 1. 問題設定

この作品では、登場人物間の人間関係や怒りをかう状況に関して極めて抽象的な記述しか提供されていないので、どうしてこのような問題状況が生じてしまっているのか、その具体的な原因が想像しがたい。野村(2005)が論じているように、女性の怒りやそれに伴う語り手の苦悩を主題にしているように見えるが、それ自体に焦点をあてているというよりも、思い込みや想像力などによって事態の深刻度の理解が変化する可能性についてまとめた小品であるように思われる。事実、「durchschauen“、„merken“, „einsehen“, „erkennen“ という認識にかかわる特定の動詞が要所要所で使用され、その動詞によって表わされる認識の度合いの違いとその主語との係わりにより認識能力に優劣が存在していることが提示される。その中には、「お見通し発言」を暗示するような表現も使用される。「お見通し発言」とは、話し手が対話相手に対して、その人物の考えていることを面と向かって断定的に提示する発話のことである(西嶋, 2005; Nishijima, 2013a)。この作品では、登場人物間に対面コミュニケーションが行われるわけでもなく、また、『父への手紙』とも異なり、直接話しかける相手が想定されているわけでもない。その意味で、「お見通し発言」自体は出現しない。

ここで『小さな女』と『父への手紙』の異同について見ておこう(西嶋, 2012)。両者とも、1人称の語り手によって描かれる。ただし、『父への手紙』の登場人物は語り手とその父親であり、それぞれ1人称と2人称で描写されるが、父親の視点からの発言も提示される。他方、『小さな女』では1人称の語り手と3人称で提示される小さな女、そして世間の人々が登場するが、語るのは語り手のみである。『父への手紙』では、それぞれの相手を主語にした「お見通し発言」が認められるが、『小さな女』ではそもそも発言は記されていない。すべてが地の文によって構成されている。そのかわりに、お見通し行為に関連する動詞が、上で指摘したように、メタ表現として使用される。したがって、両作品とも「お見通し発言」の基礎となるお見通し行為は共通してなされている。

「お見通し」能力に関して、『父への手紙』では、父親よりも語り手の息子のほうが勝っていることが最終的に確認され、これにより、息子の優位性が主張される。本論では、①『小さな女』も同様に、小さな女と公衆(世間)との関係において、お見通し行為能力の優劣がこの作品のテーマになっていることを指摘し、②「語り手の「お見通し」能力が他の登場人物よりも勝っていること確認して語り手が安堵する過程を明らかにする。この作業によって、『小さな女』が『父への手紙』とお見通し能力の優劣という点で同様の構造を持つことを主張する。

次節では、お見通し行為が具体的にどのように事態と関連づけられて描かれるのかを見てみる。

## 2. お見通し行為の表現

事態が、事実関連として叙述されるのか、推量などによる主観として提示されるのかを見ていく。その際、認識にかかわる動詞にも着目することにより、事態把握の認識能力がどのように扱われているのかを確認することができるはずである。

### 2.1. 第1段落

まず、女性の不満や行動は、直説法という話法により事実関連として提示される。次のドイツ語原文で下線を施してある定動詞はすべて直説法である。なお、参考のために、原文の下に日本語訳を載せておく(以下、同様)。

Diese kleine Frau nun ist mit mir sehr unzufrieden, immer hat sie etwas an mir auszusetzen, immer geschieht ihr Unrecht von mir, ich ärgere sie auf Schritt und Tritt; ...

(Eine kleine Frau, p. 322)

ところでこの小さい女はぼくに対してひどく不満を抱いている。彼女は

いつでもぼくに不平を言い、絶えずぼくから迷惑を蒙ると称している。ぼくは一步ごとに彼女を焦立たせるらしいのだ。

(円子修平訳『小さい女』, p. 16-62)

女性が語り手に対して不満をもっていることが提示される。その根拠として、語り手に対していつも批判することが挙げられる。その批判の内容は、語り手から不当な扱いを受けたり、語り手が女を怒らせているというものだ。これらはすべて、直説法という話法が採用され、事実関連として提示されている。ところで、日本語では人称制限と呼ばれる、主語と思考動詞との間に文法的制約があるために、日本語訳では3人称の内面世界は推量(「らしい」というモダリティを用いて表わされるが(日本語訳の下線部参照)、ドイツ語ではそのような制限がないので、女の不満が事実関連として提示される(これは「証拠性」という観点からの研究テーマとなりうる。 Nishijima (2013b)を参照)。

## 2.2. 第2段落

語り手は、なぜこの女性を怒らせるのかその理由を考えてみよう。その理由は „mag sein, daß ...“ という表現により可能性として提示される(下線部参照)。したがって、語り手にもその根拠が十分に明確でないことがわかる。

Ich habe oft darüber nachgedacht, warum ich sie denn so ärgere; mag sein, daß alles an mir ihrem Schönheitssinn, ihrem Gerechtigkeitsgefühl, ihren Gewohnheiten, ihren Überlieferungen, ihren Hoffnungen widerspricht.

(Eine kleine Frau, p. 322)

ぼくは自分がどうしてこんなに彼女を怒らせるのか、なんども考えてみた。ぼくのすべてが、彼女の審美感覚や正義感、習慣、伝統、希望に抵触するのかもしれない。

(円子訳『小さい女』, p. 162)

語り手に関することのすべてが、女の美意識や正義感などに抵触しているのではないかという可能性がこの推測という形式 („mag sein, daß ...“) を用いて指摘されるわけである。

次に、この女性と語り手との間には語り手が原因で女性を悩ませるような関係が全くないことが指摘される。したがって、語り手を無関係な他人と見なせば、問題は解消されるはずである。それが英語の仮定法に相当する話法の接続法2式を用いて語り手の推測として提示される（下線部参照）。

Es besteht ja gar keine Beziehung zwischen uns, die sie zwingen würde, durch mich zu leiden. Sie müßte sich nur entschließen, mich als völlig Fremden anzusehn, sie müßte sich nur entschließen, meine Existenz zu verbessern, ... und alles Leid wäre offenbar vorüber. ... sie kümmert nichts anders als ihr persönliches Interesse, nämlich die Qual zu rächen, die ich ihr bereite, und die Qual, die ihr in Zukunft von mir droht, zu verhindern.

(*Eine kleine Frau*, p. 322-323)

ぼくたちの間には、彼女がぼくのせいで苦しまねばならないような関係はまったく存在しない。彼女はただ、ぼくを赤の他人と見做す決心をしさえすればいいのだ。(略) そうすればきっとあらゆる苦痛は消えてしまうだろう。(略) 彼女の心を占めているのは、彼女自身に関することばかり、つまりぼくが彼女にあたえた苦痛に復讐し、将来ぼくが彼女に加えるかもしれない苦痛を芟除することばかりなのだ。

(円子訳『小さい女』, p. 162)

### 2.3. 第3段落

このように、この女性は語り手を関係のない他人として扱いさえすれば、この女性の悩みはなくなるはずであるが、彼女はそうしない。苦しみを与えられていることに対して報復したり、さらなる苦しみを避けようと、一方的に心を砕いていることが直説法により事実関連として説明される（上例の二

重下線部参照)。同じことは、後段でも次のように指摘される。

..., da mir ja die Frau völlig fremd ist und die Beziehung, die zwischen uns besteht, nur von ihr hergestellt ist und nur von ihrer Seite aus besteht.

(*Eine kleine Frau*, p. 326)

なぜなら彼女はぼくにとって赤の他人であり、ぼくたちの間にある関係は彼女が作り出して、彼女の側からの一方的なものにすぎないのだからと、(略)

(円子訳『小さい女』, p. 164)

このように、ここにおいても語り手にとって本来関係はないのに、関係が女性の側から一方的に作り上げられていると直説法により事実関連として指摘される(下線部参照)。

しかし、関係がないとはいえ、彼女の怒りが彼女の体調に影響を与えているのは外見からして明らかなので、ある種の責任はあるということが直説法により事実関連として指摘される(下線部の定動詞 *liegt* 参照)。話が前後するが、次の箇所を確認してみよう。

Auch liegt ja, wenn man will, eine gewisse Verantwortung auf mir, denn so fremd mir die kleine Frau auch ist, und so sehr die einzige Beziehung, die zwischen uns besteht, der Ärger ist, den ich ihr bereite, oder vielmehr der Ärger, den sie sich von mir bereiten läßt, dürfte es mir doch nicht gleichgültig sein, wie sie sichtbar unter diesem Ärger auch körperlich leidet.

(*Eine kleine Frau*, p. 323)

あるいはぼくにも一種の責任があるのかもしれない。なぜなら、この小さい女はぼくにとって赤の他人ではあるけれども、そしてぼくたちの間にある唯一の関係は、ぼくが彼女に掻き立てる忿懣、あるいはむしろ彼

女が自分からすすんでぼくをきっかけにして掻き立てる忿懣であるとしても、彼女がこの忿懣のために肉体的にも目に見えて苦しんでいることに、ぼくが無関心でいることは許されないであろうからだ。

(円子訳『小さい女』, p. 162)

怒りの体調への影響が明らかなので、無関心でいられないだろうとの語り手の判断が接続法2式の助動詞により推測として提示される(二重下線部参照)。

女の体調に影響があることから、まわりの人たちがそれを心配し、その原因を探ろうとするが、見つけれないことが直説法により事実関連として指摘される(下線部参照)。

... sie macht damit ihren Angehörigen Sorgen, man rät hin und her nach den Ursachen ihres Zustandes und hat sie bisher noch nicht gefunden.

(*Eine kleine Frau*, p. 324)

(略) そのために彼女は親戚のひとたちに心配をかけているのだ。親戚のひとたちはあれこれとこんなことになった原因を推測しているが、まだそれをつきとめられずにいる。

(円子訳『小さい女』, p. 163)

親戚の人たちには彼女の体調不良の原因はわからないままである。しかし、その原因が怒りにあることを知っているのは語り手だけであると指摘される。そして、彼女には十分な強さが備わっているので自分で克服できるはずだと推量を表わす副詞 (*wahrscheinlich*) を用いて述べる。

Ich allein kenne sie [die Ursachen ihres Zustandes], es ist der alte und immer neue Ärger. ... sie ist stark und zäh; wer sich so zu ärgern vermag, vermag wahrscheinlich auch die Folgen des Ärgers zu überwinden;

(*Eine kleine Frau*, p. 324. [ ]による補足と下線による強調は論者による)

しかしぼくだけは知っているのだ。前々からの、しかしそのつど新しい忿懣がその原因なのだ。(略) 彼女は頑健で強靱な女なのだ。彼女のように憤慨できる人間はおそらくその憤慨が惹き起す結果をも克服できるのだろう。

(円子訳『小さい女』, p. 163)

ところが、実は彼女は苦痛を感じているふりをして、それによって世間の注意を語り手に向けているのではないかとの疑いを語り手はもつにいたる。語り手の存在自体のために彼女が悩まされていることを公表すること、そして、それを他者に訴えかけることは彼女にとって自分自身を貶めることになるだろうとの推測を接続法2式により述べる(前半一重下線部を参照)。しかし、反抗心にのみ基づいて語り手の「私」と関わっている。したがって、そのような不純なことは、恥だということになるであろうと同じく接続法2式により語り手の推測として述べられる(後半一重下線部を参照)。

... ich habe sogar den Verdacht, daß sie sich – wenigstens zum Teil – nur leidend stellt, um auf diese Weise den Verdacht der Welt auf mich hinzulenken. Offen zu sagen, wie ich sie durch mein Dasein quäle, ist sie zu stolz; an andere meinerwegen zu appellieren, würde sie als eine Herabwürdigung ihrer selbst empfinden; nur aus Widerwillen, aus einem nicht aufhörenden, ewig sie antreibenden Widerwillen beschäftigt sie sich mit mir; diese unreine Sache auch noch vor der Öffentlichkeit zu besprechen, das wäre für ihre Scham zu viel.

(*Eine kleine Frau*, p. 324)

ぼくは彼女が——すくなくとも部分的には——世間の嫌疑をぼくに向わせるために、苦しんでいるふりをしているだけなのだと思ってしまう。ぼくという存在が彼女にとって苦痛である、と公然と認めるには、彼女は誇りが高すぎる。ぼくごときものことで他のひとびとに訴えるのは、



自分を貶めるものでしかないと思うのだろう。ただ厭悪から、けっして熄むことのない、永遠に彼女を駆り立てる厭悪から、彼女はぼくに拘っているのだ。こういう不健全な葛藤を公衆の前にまでもちだして喋るのは、彼女の羞恥心にとって我慢のならないことだろう。

(円子訳『小さい女』, p. 163)

ここでもう1点注意すべきなのは、彼女が語り手によって悩まされているということが不純なこと (unreine Sache) として語り手によって提示されている点である (二重下線部参照)。これは彼女の怒りが対抗心という個人的で勝手な理由であるとの語り手の評価を反映しているといえる。ここに、女の一方的な思い込みによるものという、語り手の解釈が現われていると見ることができる。なお、日本語訳では、「不健全な葛藤」と訳されているが、この訳語では語り手の解釈が伝わりにくいだろう (下線部参照)。

話はさらに展開する。語り手の疑念のように、世間の目を語り手に向けようとする女性の側の期待が万が一実際にあったとしても (接続法2式の „sollten“ により実現の可能性が極めて低いことが示唆されている点に注意)、それは彼女の思い違いである (täuscht) と直説法で断定的に表現している。世間は彼女の期待通りには動かないだろうと推量の助動詞 „wird“ により語り手は述べているからだ。語り手は自分が女性が考えているような役立たずな人物ではないと直説法の „Ich bin“ により断言し、彼女の眼にはそう見えているだけと同じく直説法の „bin ich“ により明言している。したがって、誰も納得させることはできないだろうと推量の助動詞 „wird“ により述べている。

Nun, sollten dies wirklich ihre Hoffnungen sein, so täuscht sie sich. Die Öffentlichkeit wird nicht ihre Rolle übernehmen; ... Ich bin kein so unnützer Mensch, wie sie glaubt; ... nur für sie, für ihre fast weißstrahlenden Augen bin ich so, niemanden ändern wird sie davon überzeugen können.

(Eine kleine Frau, p. 325)

ところで、もしほんとうにこんなことを望んでいるとすれば、彼女は思い違いをしているのだ。公衆はそんな役割を引き受けたりはしないだろう。

(略) ぼくは彼女が考えるほど無用な人間ではない。(略) ただ彼女にだけ、彼女の白く光っている眼にとってだけぼくがそんなふうに映るのであって、いくら彼女がそう主張しても、誰も彼女の主張を信じないだろう。

(円子訳『小さい女』, p. 163)

ここで、「彼女が考えるほど」 („wie sie glaubt“) により、また、「ただ彼女にだけ、彼女の白く光っている目にとってだけ」 („nur für sie, für ihre fast weißstrahlenden Augen“) とたたみかけるように、女性が予想していることや、女性の視点に映る語り手に言及される。これは、語り手による女に対する「お見通し行為」であると見なすことができるだろう。つまり、女性の見方の限界を提示している。リヒター(1962)が正しく指摘しているように、この作品で唯一提示される女性の考えである(p. 240)。

では、何が問題か。注意深い人の中には語り手の「私」に原因があることを見抜けるくらいに注意深い人がいると指摘される。そうなると、自分と女性との関係が世間に知れるところとなってしまう、その理由を問われることになるだろうと助動詞 (wird) により推測する。そうなると、それに対抗するのが難しいだろうと語り手の予想が推量の助動詞 (wird) により提示される。

... und einige Aufpasser, eben die fleißigsten Nachrichten-Überbringer, sind schon nahe daran, es zu durchschauen oder sie stellen sich wenigstens so, als durchschauten sie es, und es kommt die Welt und wird mir die Frage stellen, warum ich denn die arme kleine Frau durch meine Unverbesserlichkeit quäle und ob ich sie etwa bis in den Tod zu treiben beabsichtige ... - wenn mich die Welt so fragen wird, es wird schwer sein, ihr zu antworten.

(Eine kleine Frau, p. 325-326)

そして偵察好きな連中、彼女についての情報をいちばん熱心にぼくのと

ころへもってくる連中はもうほとんど事情を見抜いているらしいが、あるいは、すくなくとも見抜いたふりをしているが、そのときには世間がやって来て、なぜお前はその性懲りもない悪質さでこの哀れな小さい女を苛めるのか、お前は彼女を死にまで追いつめるつもりなのか、(略)と問い糺すだろう—世間がぼくにそんな問を向けるとすれば、それに答えることは困難だろう。

(円子訳『小さい女』, p. 163-164)

ここで、世間の連中がこの事態を見抜くことに関して、„durchschauen“ という認識能力に関わる「お見通し」動詞が使用されている点に注目しておこう(二重下線部参照)。周りの人の中には「お見通し行為」ができる人がいると見ているわけである。

#### 2.4. 第4段落

厄介な事態が起こらないように、世間が介入する前に彼女の怒りを和らげる必要がある。それには語り手自身が変わるしか道は残されていないだろうとの考えが接続法2式(*bliebe*)によって提示される(下線部参照)。

So bliebe mir eigentlich doch nur übrig, rechtzeitig, ehe die Welt eingreift, mich soweit zu ändern, daß ich den Ärger der kleinen Frau nicht etwa beseitige, was undenkbar ist, aber doch ein wenig mildere.

(*Eine kleine Frau*, p. 327)

したがって結局は、時機を失することなく、世間が介入して来る前にあの小さい女の忿懣を、消滅させることは不可能だとしても、いくらか和らげる程度にぼく自身を変えることしか残されていない。

(円子訳『小さい女』, p. 164)

実際に変わろうと試みた結果、変化は起こったことが直接法の過去形によ

り事実関連として記述される（一重下線部参照）。しかし、その意図に気づかれてしまったので、失敗に終わった。そのことがつぎのよう述べられる。

Und ich habe es ehrlich versucht, ... einzelne Änderungen ergaben sich, waren weithin sichtbar, ich mußte die Frau nicht auf sie aufmerksam machen, sie merkt alles derartige früher als ich, sie merkt schon den Ausdruck der Absicht in meinem Wesen; aber ein Erfolg war mir nicht beschieden.

(*Eine kleine Frau*, p. 327-328)

そしてぼくは、(略)まじめにそれをやってみた。(略)さまざまな変化が起り、人目にもつくようになったが、それに彼女の注意を促す必要はなかった。彼女はそういうことにはぼくよりも早く気がつく、ぼくの挙動からたちまちぼくがなにを企んでいるか見抜いてしまうのだ。成功はぼくにあたえられなかった。

(円子訳『小さい女』, p. 165)

彼女に語り手の意図が気づかれていることが指摘されている。これは „merken“ という動詞の現在形で叙述されているので、習慣的であると考えることが示唆されている（二重下線部参照）。女性の直感的な「お見通し能力」に言及しているわけである。

しかしながら、女性による語り手への不満は、語り手の見るところ、根本的なものなので、取り除くことは不可能であると直説法により事実関連として指摘される（下線部参照）。

Ihre Unzufriedenheit mit mir ist ja, wie ich jetzt schon einsehe, eine grundsätzliche; nichts kann sie beseitigen, nicht einmal die Beseitigung meiner selbst; ...

(*Eine kleine Frau*, p. 328)

ぼくに対する彼女の不満は、いまではぼくも洞察しているように、原則的なものなのだ。なにものも、たとえぼくが自分を抹殺したとしても、この不満を除去することはできない。

(円子訳『小さい女』, p. 165)

今度は、語り手の「見通す能力」が「いまではぼくも洞察しているように」 („wie ich jetzt schon einsehe“) の „einsehen“ という、本質を見抜くという意味で使用される動詞で説明される。

「見通す能力」 (einsehen) に関して言えば、彼女の能力が語り手自身のそれより劣っているとは考えにくい (一重下線部参照)。彼女にはたしかに鋭い「見通す能力」がそなわってはいるが、それが闘争心によって忘れられてしまうのだと直説法の動詞 „vergißt“ により事実関連として指摘される (二重下線部参照)。

Nun kann ich mir nicht vorstellen, daß sie, diese scharfsinnige Frau, dies nicht ebenso einsieht wie ich,... Gewiß sieht sie es ein, aber als Kämpfernatur vergißt sie es in der Leidenschaft des Kampfes...

(Eine kleine Frau, p. 328)

ところでぼくはこの炯眼な女がこの事実を、(略) ぼく同様に洞察していないとはとうてい想像できない。確かに彼女は知っている。ただ生まれつきの戦士である彼女は、闘いの情熱のなかでそれを忘れてしまう。

(円子訳『小さい女』, p. 165)

## 2.5. 第5段落

認識能力に関わる動詞 „einsehen“ との関連で、すでに使用されている „durchschauen“ が再び提示される。女性の語り手への不満について友人に相談した際、問題は誰もが見通せるものであることが „durchschauen“ という動詞を用いて指摘される (下線部参照)。この動詞はすでに指摘したように、表面

上は見えにくい相手の心のうちを見抜くという意味であり、直前で使用されている „einsehen“ とほぼ同義で用いられている。

...; die Dinge liegen zwar einfach, jeder kann sie, wenn er näher hinzutritt, durchschauen, aber so einfach sind sie doch auch nicht, daß durch mein Wegfahren alles oder auch nur das Wichtigste in Ordnung käme.

(*Eine kleine Frau*, p. 329)

事柄は確かに単純で、すこし立ち入って見れば誰だっで見極めがつく。しかし、ぼくが旅行に出ることですべてが、あるいはいちばん肝腎なところだけにせよ、解決するというほど単純でもない。

(円子訳『小さい女』, p. 165)

## 2.6. 第6段落

事細かに考えてみると、変化はあった。しかし、それは事態の変化ではなく、語り手自身の彼女に対する見方(Anschauung)が変わったことによるものだと指摘される。

Wie es sich ja überhaupt bei genauerem Nachdenken zeigt, daß die Veränderungen, ... keine Veränderungen der Sache selbst sind, sondern nur die Entwicklung meiner Anschauung von ihr, ...

(*Eine kleine Frau*, p. 330)

すこし詳しく考えてみればわかることだが、(略)変化は、事柄自体の変化ではなく、この事柄に関するぼくの考えの変化にすぎない(略)

(円子訳『小さい女』, p. 166)

## 2.7. 第7段落

さらに、状況が理解できるようになったと思うことにより、落ち着いて事

態と向き合えるようになったと説明される。

Ruhiger werde ich der Sache gegenüber, indem ich zu erkennen glaube, daß eine Entscheidung, so nahe sie manchmal bevorzustehen scheint, doch wohl noch nicht kommen wird;

(*Eine kleine Frau*, p. 330)

断罪は、しばしば目前にさし迫っているように見えても、結局はまだ行われまいだろうということがわかったように思うので、この問題に対しては前よりも冷静になった。

(円子訳『小さい女』, p. 166)

この記述によって、認識能力の変化したことがわかる。ここでは、„erkennen“ という認識動詞が用いられ、見通す能力を表わしていることに注意しておこう（下線部参照）。そして、それが推量をともなって叙述されている。

以下の箇所に接続法 2 式（würden）により、世間の連中は機会さえ見つければ介入しようとする可能性が指摘されるが（一重下線部参照）、実際はそのような機会は見つけられないし、彼らは嗅覚にのみにたより、限界があることが直説法（finden）により事実関連として叙述される（二重下線部参照）。

Und daß Leute sich in der Nähe herumtreiben und gern eingreifen würden, wenn sie eine Möglichkeit dazu finden würden; aber sie finden keine, bisher verlassen sie sich nur auf ihre Witterung, und Witterung allein genügt zwar um ihren Besitzer reichlich zu beschäftigen, aber zu anderem taugt sie nicht. ... immer haben sie aufgepaßt, immer haben sie die Nase voll Witterung gehabt, ...

(*Eine kleine Frau*, p. 331)

ひとつとは近くをうろついて、機会さえあれば介入してくるだろう。し

かし、その機会がないので、かれらは自分たちが嗅ぎつけたものしか当てにできずにいる。そして嗅ぎつけるということは、それだけで鼻の所有者を多忙にするに足りるが、他の事には役立たない。(略) いつでも眼を光らせ、いつでも嗅ぎつけた匂いで鼻を膨らませるのだが、(略)

(円子訳『小さい女』, p. 166-167)

他方、語り手は認識能力が向上し、かぎ回る連中の区別がつくようになったことが „erkennen“ という認識判断を表わす動詞 (ただし、ここでは完了分詞形 „erkannt“) によって述べられる (下線部参照)。

Der ganze Unterschied besteht darin, daß ich sie allmählich erkannt habe, ihre Gesichter unterscheide; ...

(*Eine kleine Frau*, p. 331)

以前と変わったことといえば、ぼくはしだいにかれらの見分けがつくようになり、かれらの顔を識別できるようになったことだ。

(円子訳『小さい女』, p. 167)

つまり、見通す能力が向上しているのは語り手のみで、それ以外の人物は、その能力について変化がないということである。

### 3. 認識動詞と主語

以上見てきたように、直説法と接続法という2つの話法がたくみに使い分けられ、事態が事実関連として提示される場合と、語り手の推量あるいは思考内容として提示される場合に分けられていることがわかった。また、認識能力を表わす動詞が要所要所で用いられていることも確認した。本節では、この認識に関する動詞の用法について考察する。

これまで論じてきた範囲内で出現した認識に関わる動詞はつぎの4つで



ある：

(A) *durchschauen*; (B) *merken*; (C) *einsehen*; (D) *erkennen*

これらの動詞の用法を、それぞれが出現する場面ごとに確認してみよう。これらの動詞の意味は、『ドイツ語ユニバーサル辞典』(DUW)に基づき、つぎのように理解しておく。(A) *durchschauen* は隠されているものを見抜くこと、(B) *merken* は知覚や直感によって気づくこと、(C) *einsehen* は相手が認めたくないものを洞察すること、(D) *erkennen* は識別がつくこと。

### 3.1. (A) *durchschauen*

この動詞の主語として現われるのは「世間の注意深い人たち」(„*einige Aufpasser*“)と「誰も」(„*jeder*“)の2つである。具体的な表現はつぎのとおりである(イタリックによる強調は論者。以下、同様)。

..., und *einige Aufpasser*, eben die fleißigsten Nachrichten-Überbringer, sind schon nahe daran, es zu *durchschauen* oder sie stellen sich wenigstens so, als *durchschauten* sie es, ... (p. 325)

..., die Dinge liegen zwar einfach, *jeder* kann sie, wenn er näher hinzutritt, *durchschauen*, ... (p. 329)

上の文脈では、女と私との関係に関する事態について表面的にはわからないことに気づくことが述べられている。2つめの文脈では、誰でも事態を詳しく見れば理解できるといった意味で使われている。両者とも、すぐにはわからないことや見えないことを見通し、見破る能力を表わしているといえよう。

### 3.2. (B) *merken*

この動詞の主語として登場するのは「その小さな女性」(„*die kleine Frau*“)を指示する人称代名詞 *sie* だけである。用法を確認してみよう。

*sie merkt* alles derartige früher als ich, *sie merkt* schon den Ausdruck der Absicht in meinem Wesen; ... (p. 327)

この文脈では、「表われ」 („Ausdruck“) がその目的語として用いられていることから、知覚能力や直感によって理解する能力として使われているようである。女性の直観的能力という特性が垣間見られるようである。

### 3.3. (C) *einsehen*

この動詞の主語は語り手の「私」 („ich“) と「この感の鋭い女」 („diese scharfsinnige Frau“) を指示する *sie* の2つである。文脈を考察してみよう。

Ihre Unzufriedenheit mit mir ist ja, wie *ich* jetzt schon *einsehe*, eine grundsätzliche; ... (p. 328)

Nun kann ich mir nicht vorstellen, daß *sie*, diese scharfsinnige Frau, dies nicht ebenso *einsieht* wie ich, ... Gewiß *sieht sie* es *ein*, aber als Kämpfernatur vergißt sie es in der Leidenschaft des Kampfes, ... (p. 328)

「根本的な」 („grundsätzliche“) という表現が使用されていることから、本質的なものを見抜く洞察する能力という意味で使用されていると判断できよう。そのような能力は、語り手と女性の双方に備わっていることがわかる。これは、「お見通し」能力については、両者とも同等であることを示唆するものである。ところが、女性はその闘争心 („Kämpfernatur“) のためにそれが有効に使えない状態であることが指摘される。

### 3.4. (D) *erkennen*

この動詞の主語は語り手の「私」 („ich“) のみである。2つの文脈で用いられている。

Ruhiger werde ich der Sache gegenüber, indem *ich* zu *erkennen* glaube, daß

eine Entscheidung, so nahe sie manchmal bevorzuzustehen scheint, doch wohl noch nicht kommen wird; ... (p. 330)

Der ganze Unterschied besteht darin, daß *ich* sie allmählich *erkannt* habe, ihre Gesichter unterscheide; ... (p. 331)

最初の文脈では、「決定」(„Entscheidung“)がまだ来そうにないと時期を判断する能力として使用されている。もう一つの文脈は、世間の中で問題となっている事態をかぎつけようとしている連中の区別、すなわち、識別がつくようになったという意味で使われている。両者とも違いが分かることに焦点があてられている。

4つの動詞は、認識するという点で意味を共有するが、以上見てきたように、動詞の選択は、その主語で表わされるその能力を有する人物と目的語で表現される対象と関連しているようだ。たとえば、*merken* は女性特有の直観的な認識能力と関連づけられて使用されている。そして、このような動詞の使用から、認識能力を十分に発揮できるのは、語り手である「私」(*ich*)であることが判明する。

## おわりに

お見通し行為に関してこの物語を分析した結果、語り手がその能力の点で優位にたっていることが明らかにされた。女のお見通し能力は怒りのために用を成さず、世間の人々の中にはお見通し能力に優れたものもいるにはいるが、おのずと限界がある。結局のところ、語り手の能力は他の人物に比べて優れているというわけである。いろいろと悩みが語られてはいるが、語り手の認識能力が他者のそれを凌駕しているので、問題のないことが明らかにされたことになる。

このように、小さな女と公衆(世間)との関係において、お見通し行為能力の優劣がこの作品のテーマになっていることが確認された。また、語り手の

「お見通し」能力が他の登場人物よりも勝っていること確認し、納得する過程が明らかにされた。したがって、『小さな女』が『父への手紙』とお見通し能力の優劣がテーマになっているという点で同様の構造を持つとすることができる。

## 使用テキスト

Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. von W. Kittler, H.-G. Koch, und G. Neumann. Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

マックス・ブロート編集『決定版 カフカ全集1 変身、流刑地にて』（川村二郎・円子修平訳）、新潮社、1980.

## 文献

DUW *Deutsches Universalwörterbuch*. Hrsg. vom Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion. 4., neu bearb. Und erw. Aufl., Mannheim, usw.: Duden, 2001.

西嶋 義憲 (2012): 「お見通し行為としての『父への手紙』」『かいろす』第45号, 18-31.

Nishijima, Yoshinori (2013a): “Seeing-through Utterances in the Work of Franz Kafka: A Functional Analysis of Three Novels.” In: Georgeta Rata (ed.): *Linguistic Studies of Human Language*. Athens: Athens Institut for Education and Research, 55-68.

Nishijima, Yoshinori (2013b): “Ignorance of Epistemological Distance: Rhetorical Use of Non-evidentials in the Work of Franz Kafka.” Paper presented at the International Linguistic Conference: Distance in Language, Language of Distance at the LMU Munich on the 5th-6th April, 2013.

野村 廣之 (2005): 「ヤーヌスの解剖——1922年以降の後期カフカ - テキストの構造分析」. 博士論文(東北大学), 276-281.

Richter, Hartmut (1962): *Franz Kafka. Werk und Entwurf*. Berlin: Rutten & Loening.